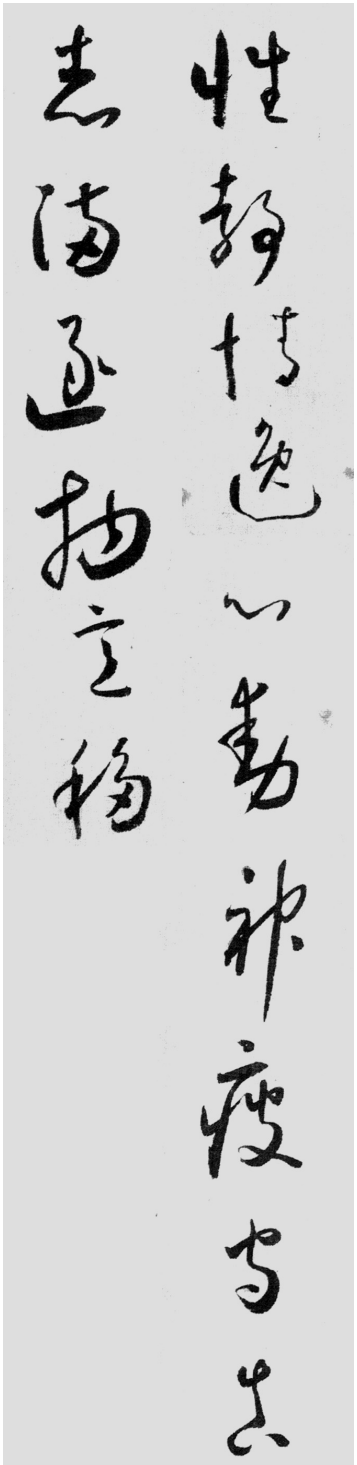
草書千字文　懐素



性静情逸。心動神疲。守真志満。逐物意移。
性静かなれば情逸し、心動けば神疲る。真を守れば志満ち、物を逐えば意移る。
人の本性が落着いて静かなときは外に発する情も安らかであるが、心が刺激に動かされるときは精神が疲労してしまう。自然の道を守れば、志は満たされ、物を追い求めれば、心もそれにつれて変化して定まるところがない。

※随意部参考（半紙・条幅）としてもご活用下さい。抜粋可。

一字書（九月二十二日締切）

課題

馳

(1)書体自由
(2)半紙タテ　※ヨコは中止
(3)落款は余白に調和を工夫し書き入れる
(4)出品料　四四〇円
(5)バーコード券貼付　太枠内の臨昇の隣の空欄に
一字と記入　段級は無記入

昇試第一部漢字課題　（九月二十二日締切）

A

鈴木静村先生書

一雙遠岸釣魚艇　三尺近邨沽酒帘（彭汝礪）

一双遠岸釣魚の艇、三尺近村酒を沽るの帘。

行書単体作。**一**　短くグイッと。硬くならぬよう。**雙**　古典に多くの書体。要は上部を大。**岸**　この縦画の他に二本、意識せず淡々と。**釣**　渇筆の中に墨の表われ、これが〝力〟。**魚**　墨継ぎ、連火が決め手。**近**　之繞に変化を（遠）。**邨**　渇筆線「釣」参照。**沽**　三水線のコブは折り目による。**帘**　一画目からの脈絡線は弛い。ピシッと。

高橋香樹会長書

B

今月は単体の行草書。懸針（縦画の収筆部で、下に抜き出す線）のある文字が三字あり、この懸針の方向（右に、左に、真直ぐに）と長さに変化を。「**岸**」の左払いから「**釣**」の一画目に、「**沽・酒**」の三水から「**帘**」の一画目の点に繋げることにより行の流れを表出。「**酒**」は旁の構の中を左に寄せ右側に余白を。墨継ぎは、「**魚**」と「**沽**」。

訳…遠くの岸に魚を釣る小舟が浮かんでいる。近くの村の居酒屋に三尺の旗が見える。

予告（十月二十二日締切）　**新竹漸添三徑綠　好山常放一簾青（何其偉）**

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題　（九月二十二日締切）

A

平岡華雪先生書

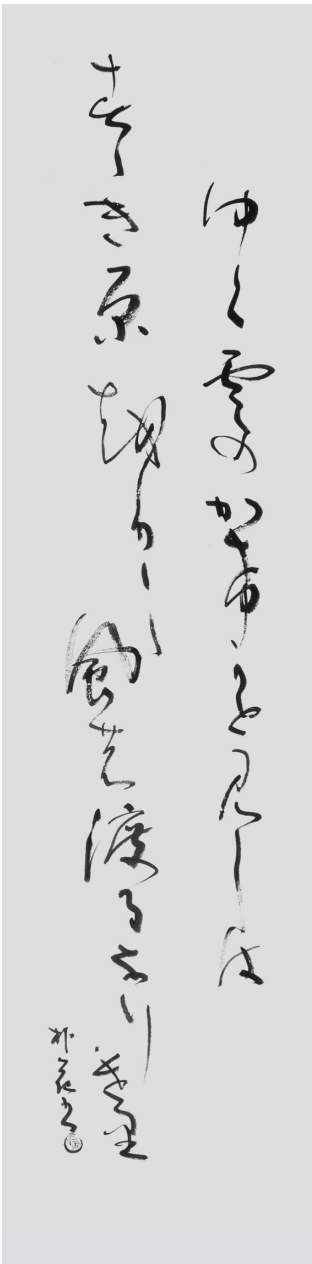
ゆく雲の影かと見しはすゝき原をりをり風のわたるなりけり（入江為守）

ゆ久雲の影かと美しは須ゝきはら越りゝゝ風のわ多るなり希り

B

向山朴花先生書

ゆ久雲のか希可と見しは春ゝき原越利ゝ、風農渡るなり遣里



入江為守は、明治から昭和時代前期に活躍した。日本の貴族院議員、官僚歌人。京都生まれ。

昭和天皇の侍従長を務めた入江相政は、為守の三男。為守は冷泉為理の三男で、幼少から父に歌学を学び、漢詩は森槐南に就いた。大正四年、御歌所長に任命され、明治天皇、昭憲皇太后の御集を編纂。

為守は多趣味でも知られていた。

学び方

「ゆき過ぎる雲の影かと見ていたら、風がすすき原の上をたびたび吹き渡っていたのです」との叙景歌です。

歌の通り、自然体で散らし方に拘わらず筆の赴くままに書いてみました。中で印象的なフレーズ、「をりをり」を「をり、ゝ」と書いた時の、紙面の「疎」の部分に「風」を重ね合わせるようにして「密」にし、中央部にふくらみをつけた位です。

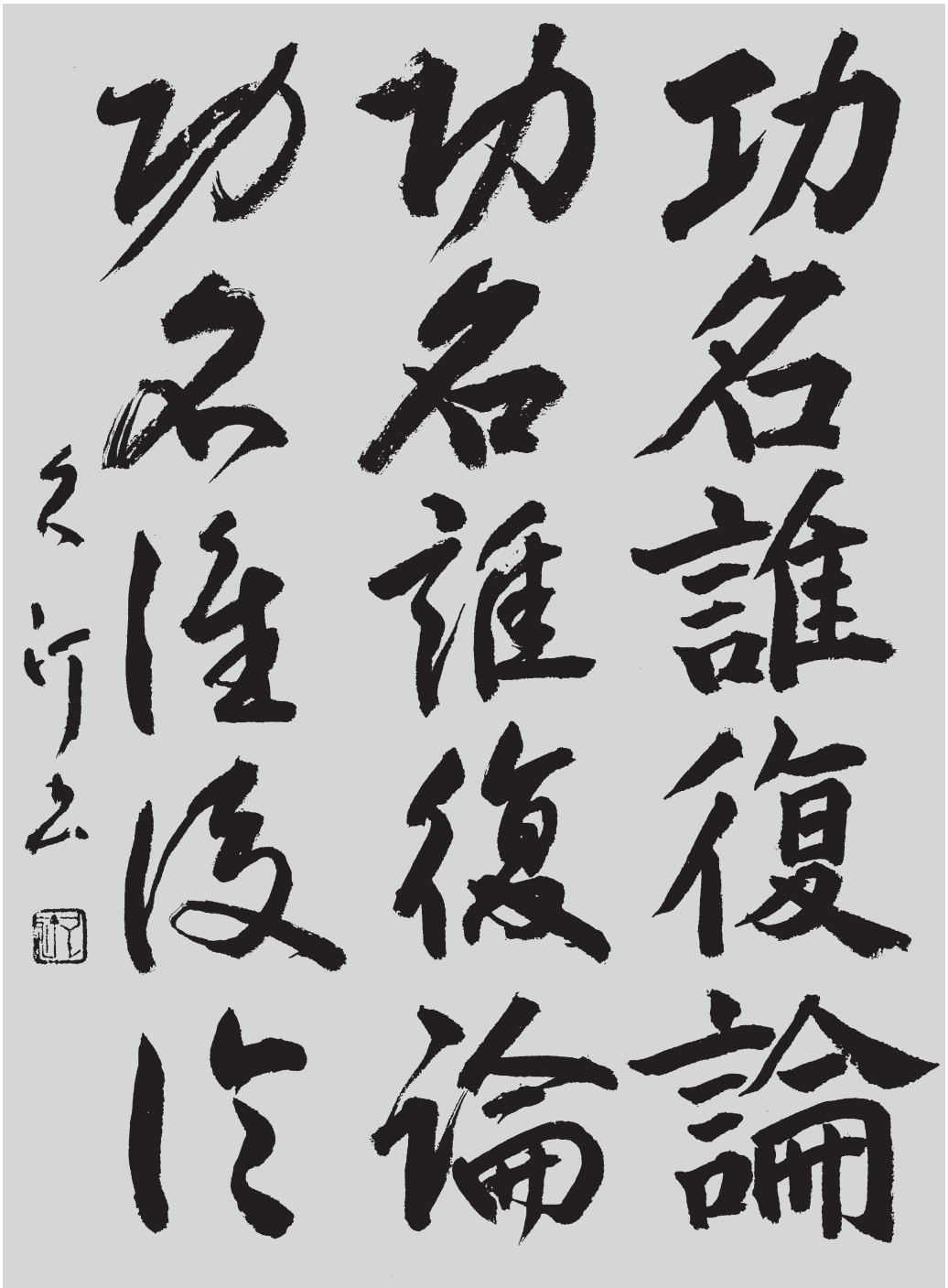
散らし書きは歌に表現された言葉と文字そのものを、変体仮名に置きかえた際の字配りにより、作品に更なる彩りと効果をもたらす表現方法だと思うのです。そして余白が文字を一層、引き立たせてくれます。

平安時代、仮名の散らし書きを「乱れ書き」とも呼ばれたとか。現在、その時代の優れた見事な古筆を多く見ることが出来ます。

予告（十月二十二日締切）　**やや暫し入日の影をとどめたる山の頂を雲つつむなり（土田耕平）**

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（九月二十二日締切）



笹崎久汀先生書

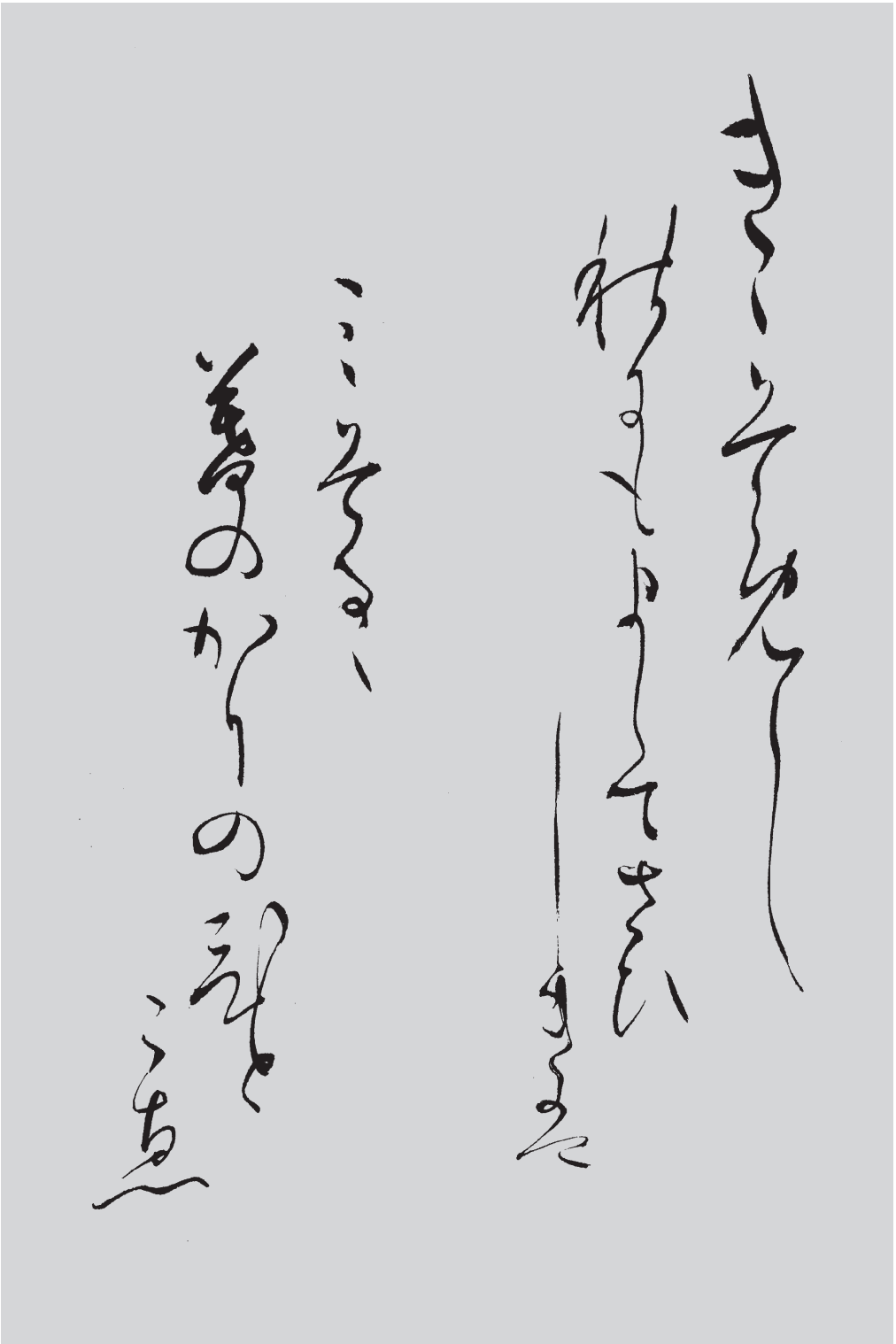
功名誰復論（魏徴）
功名誰か復（また）論ぜん

訳…功名手柄など問題でない。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題　（九月二十二日締切）

高塚竹堂先生書



ききそめし秋にもましてさびしきはみぞるる暮の雁のひと声（香川景樹）

◆注意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

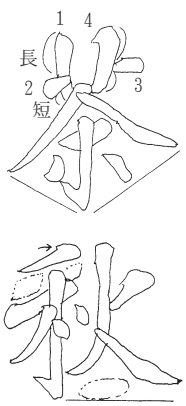
昇試第三部漢字課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

茶香秋夢の後（許渾）

訳…夢さめて茶の香高く、（夕方に詩を吟する時、松声ひびく。）

〈徹底、「左払い」！〉五文字に長短それぞれの「左払い」。特に逆筆的用筆がポイント。筆圧の利いた〝勁（つよ）さ〟が身上―。



◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部かな課題　（九月二十二日締切）

平岡華雪先生書

白樺を幽（かす）かに霧のゆく音か（秋桜子）

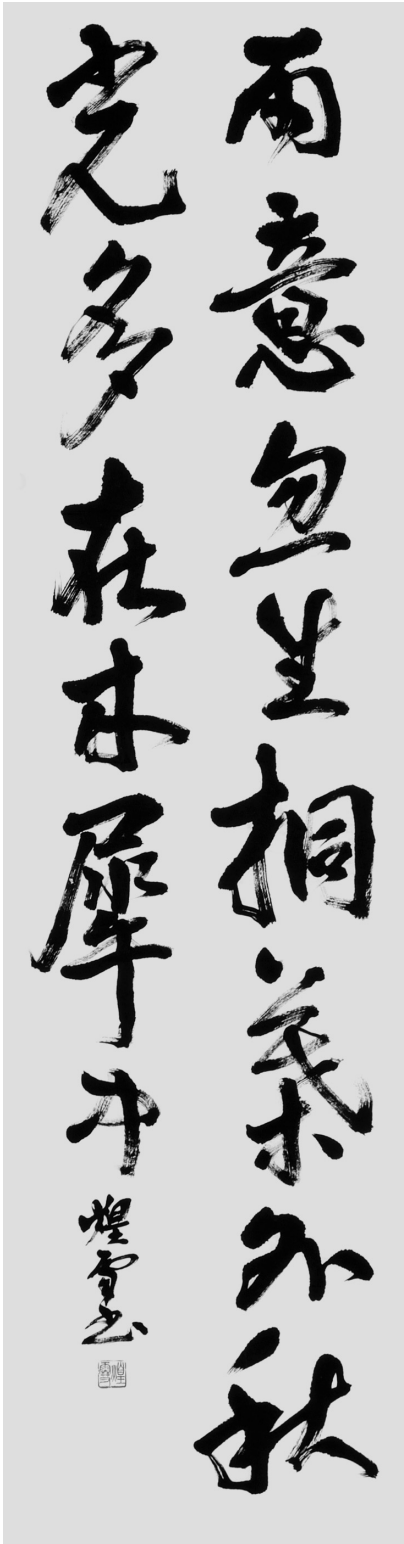
白樺をかすか尓（に）きりのゆ久（く）音か

〈右群と左群のひびき合い〉

右群二行、左群二行と落款による構成。右群がポイント。二行目をやや上方にして並立を避ける。「かすか尓」には、特に線に工夫を。左群の下五で墨継ぎ。「音か」硬くならぬように寄せたい。落款の位置、筆調が最後の〆としてウェート大である。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

星野煌雪先生書



雨意忽生桐葉外　秋光多在木犀中（劉祁）
雨意忽ち生ず桐葉の外、秋光多く木犀の中に在り。

訳…雨のけはいは急に桐の葉のあたりに生じるが、秋の景色は木犀の花の中にふかく感じられる。

青柳香竹先生書

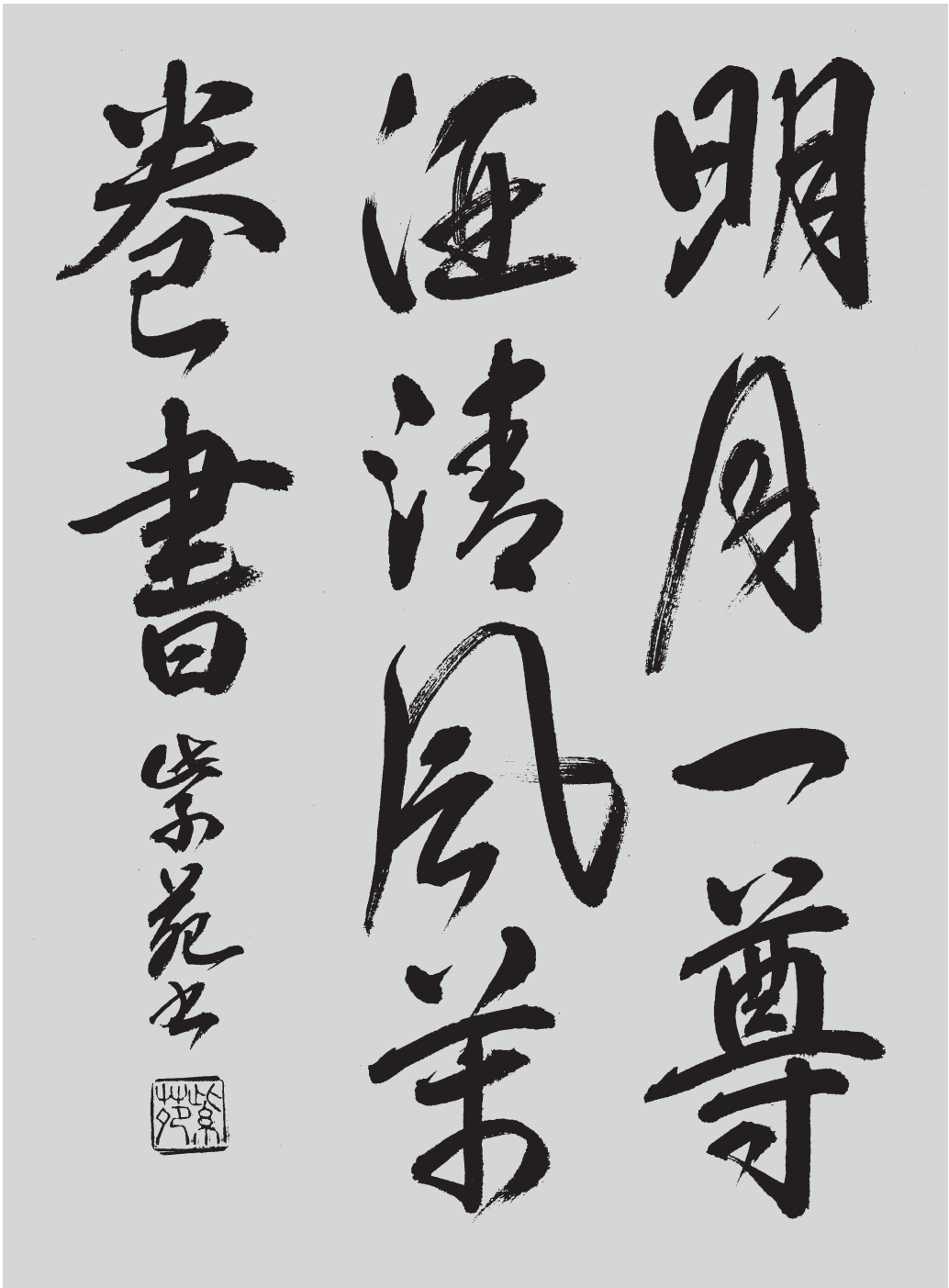
河風のすゞしくもあるかうち寄する浪とともにや秋はたつらむ（古今和歌集　紀貫之）
河風の春ゝし久裳あるかう遅よ寸留浪登ゝも耳や秋盤多つら舞

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

山田紫苑先生書

明月一尊酒　清風萬卷書（梅澤）

明月一尊の酒、清風万卷の書。



訳…明らかな月に対しては一たるの酒を酌み、清けき風に座しては万巻の書を読む。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

高山小玉先生書

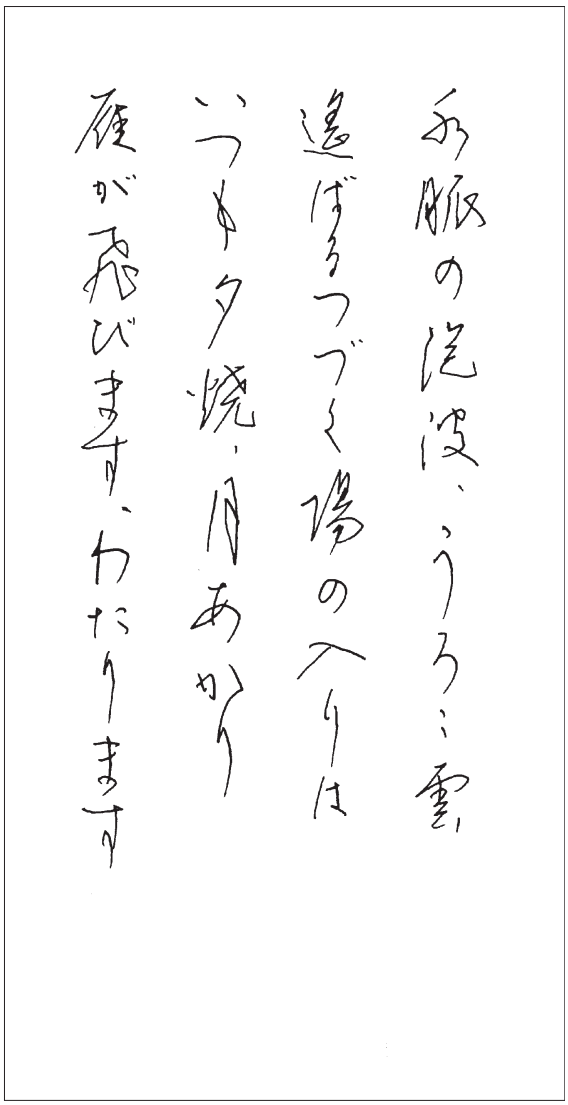
いざ歌へ我立ち舞はむぬば玉の今宵の月にいねらるべしや（良寛）
以さ歌へ我立ち舞八むぬ者玉の今宵の月二い年らるへしや

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（九月二十二日締切）

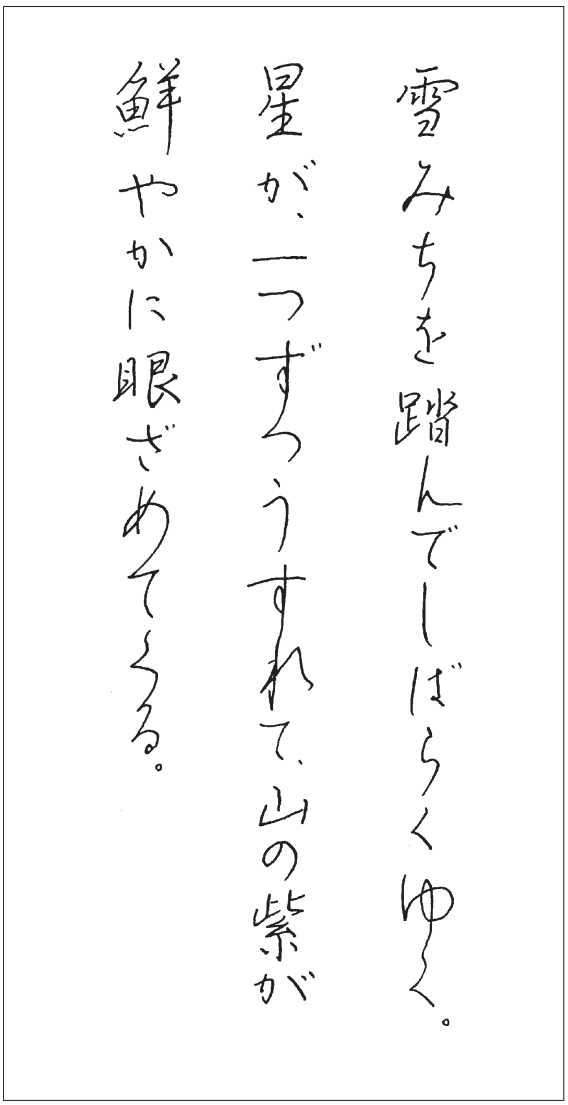
石原春香先生書

課題 1（初段以上）



湯澤春翠先生書

課題 2（初段格以下）



課題1（初段以上）
水脈（みお）の泡波（あわなみ）、うろこ雲（くも）
遥（はる）ばるつづく陽（ひ）の入りは
いつも夕焼、月あかり
雁（がん）が飛びます、わたります
『雲の歌』北原白秋

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。
(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。
(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）
(4) はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
(5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題2（初段格以下）
雪みちを踏んでしばらくゆく。
星が、一つずつうすれて、山の紫が
鮮やかに眼ざめてくる。
『私はいつでも山に登りたい』田中澄江